

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520718

研究課題名(和文)「国際英語論」の視点から、日本で英語を教える意義と効果に関する実証的研究

研究課題名(英文) Teaching World Englishes in Japan: Why and How

研究代表者

塩澤 正 (SHIOZAWA, Tadashi)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：10226095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は国際英語論の立場から、日本の教育現場で英語を教える場合の態度、留意点、基準などを国政英語論とその関連連領域から考察し、具体的に教授法や教材までを提供することである。この研究を通していくつかの論文や口頭発表と1冊の専門書(『現代社会と英語 - 英語の多様性をみつめて』)(共編著)を发表することができた。また、さらに1冊の教材『Global Activator』、と専門書『国際英語論が英語教育を救う』(仮)を執筆中であり、2014年中には出版される予定である。

研究成果の概要(英文)：The main objective of this study was to bridge the theory and concept of World Englishes to the practices of teaching English as a global language. More specifically, the researcher tried to clarify concerns of and create the benchmarks for teaching English as a lingua franca. Through this study in the past three years he presented his findings at several conferences, produced articles and a book on this theme. He is also about to publish Global Activator as a textbook and another book for teachers, World Englishes in English education in Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：国際英語論 World Englishes global English lingua franca teaching English

## 1. 研究開始当初の背景

国際英語論 (World Englishes) という考え方が脚光を浴びたのは、L. Smith(1987)や B. Kachru(1982)、D. Kristal (1997)らが世界には様々な英語が存在し、その話者の数は、ネイティブスピーカーの数をはるかに上回ることを紹介したときからである。すでにインドやフィリピンでも英語は独自の発展を遂げ、それぞれの国の中で、独特の音声大系や表現を持つようになり、英語が独立し始めている。香港やシンガポールでも同じ現象が発生している。つまり、英語はアメリカやイギリスの言語であるばかりか、「アジアの言語」の一つとなりつつある。アフリカでも同じ状況である。ここに、世界の多様な英語を前向きに認めて、お互いの英語を尊重することが大切であるという国際英語論の考え方が産まれる。

この考え方を延長すると、国際的通用度 (International Intelligibility) が高ければ、外国語としての英語学習者が目指すモデルは米の英語である必要はなくなる。この考え方に同意する者は少なくない。なぜなら、日本人がどれほど努力しても、ネイティブスピーカーと同程度の英語を話すことができるようにはならないからである。初めから到達不可能な目標よりも、国際的に通じる英語を目標とすべきであるという考え方である。しかし、ここで問題になるのは、実際教える段階となると、国際英語論の立場にたった英語教育とはどのようなものを指して言うのか、どのような基準にもとづいて英語を教えればいいのかなどが不明な点である。この理論と実践を結びつける部分がまだ研究途上にあると言ってよい。

筆者はこの国際英語論の考え方を具現すべく、Activator (金星堂) という教科書を1999年に作成し、約10年間その実践を行い、国際英語論の視点から英語を学び教える意義を考えてきた。この研究では、これをさらに発展させ、一般的な日本の英語教育の現場で、どのように国際英語論の考え方を反映させた授業展開が、どのようにすれば可能なのか、その留意点はどこか、教授法はどのような形があるのかなどを具体的に提示してみたい。

## 2. 研究の目的

世界の多様な英語をピジンとしてではなく、正統な英語として尊重するのが国際英語論の立場である。この考え方に共感を覚える英語教師は少なくない。だが、教える段階となると、国際英語論の立場にたった英語教育とはどのようなものか、どのような基準にもとづいて英語を教えればいいのか、どこの英語をモデルとすべきか、普通の授業でどのように国際英語論の考え方を具現するかなどの疑問が湧いてくる。このような疑問に答えるべく、国際英語論の立場から、日本の教育現場で英語を教えるときの考え方、態度、留

意点、基準などを、国際英語論と関連領域から考察し、最終的には具体的に教授法や教材までを提供するのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

まず、「国際英語」に関して具体的に内外の先行研究を整理し、地域英語変種の International Intelligibility に関わる諸問題を整理することから始めた。加えて日本における国際英語の立場を明らかにし、目的で述べた5つの大目標と9つのベンチマークが、指標となるかを確認した。これは、国際英語論に関して知識のあるグループとないグループ、Inner circle 圏に留学したグループと Outer circle 圏に留学したグループへのアンケート調査とインタビュー調査をすることにより明らかになった。国際英語論の視点からの英語教育における先進国であるブータンでの調査も検討していたが、様々な原因による困難が生じたため、被験者らが留学しているアメリカまで行き、被験者らとともに、世界各国からの留学生にインタビューすることにより、国際英語論のベンチマークの正当性を確認することとした。同時に、世界の諸英語を録音、ビデオ撮りすることができた。これは、その後の教材づくりの材料となった。

教材は2013年より随時作成し、それを授業で使用するによりその効果を確認した。本学に籍を置く、ネイティブ英語教員、様々な国からの留学生たちにこれらの教材の録音などに参加してもらった。このため、録音その他はすべて、学内で筆者とその協力者が行った。この教材が後述する『Global Activator』という形で2014年秋には市販されることとなった。

## 4. 研究成果

まず、国際英語論とは何かを明確にした。国際英語論は World Englishes, English as an international language, English as a lingua franca など様々な英語訳が可能であるが、そのフォーカスはどこにあり、日本人が目指す国際英語とはどのような考え方を中心においた国際英語論であるべきかをいくつかの論文と本で提示した。

次に、国際英語論の視点から英語を学ぶ意義を明確に提示した。最も大きな意義として、ネイティブスピーカーのように話さなければならないという「呪縛」から、日本人英語学習者を開放することが、英語学習を精神的にも健全化し、授業を活性化することを挙げた。また、「国際英語論」の視点から、目指すべき目標や態度を具体的に提示し、指導上の留意点を確認した。

簡単にまとめれば以下の通りである。国際英語論の視点から英語を教える場合の教育的目標をあげ、その意義を考えたい。以下の5つに集約されると考えている。

- (1) 英語の多様性や世界共通語としての英語の特徴を認識する
- (2) 多様な英語に対して非評価的で寛容な態度を育む
- (3) 国際的コミュニケーションストラテジーを身につける
- (4) 国際共通語としての自分の英語 “ My English ” を肯定する
- (5) 多様な英語を喋る人たちとコミュニケーションをとる喜びを知る  
また、上記の大目標を達成するための、ベンチマーク9つを設定した。

- (1) 英語の多様性を認識し、認める
- (2) 国際的に通じる英語と通じない英語を認識する
- (3) 自分の英語を肯定する
- (4) 国際的コミュニケーションストラテジーを身につける
- (5) 違いを楽しむ態度を身に付ける
- (6) “ English Specific ” より “ English General ” の考え方を身につける
- (7) My English を実際に使ってコミュニケーションを取る喜びを知る
- (8) 相手の英語や文化を優劣なく評価する態度を身につける
- (9) 自分の感情をコントロールする能力 (affective competence) を身につける

これらに一つ一つが、具体的にどのような形で授業展開ができるかを検証し、いくつかの論文と本にして発表した。さらに、1冊の専門書(『現代社会と英語 英語の多様性をみつめて』)と大学英語教材(『Global Activator』)を現在執筆中である。

また、9つのベンチマークの有用性や非ネイティブ英語との接触と国際英語論との関係などに関する貴重データもアンケート調査やインタビューから得ることができた。これらに関する成果は今後、引き続き発表していく予定である。

上述のように教材も教科書という形で、出版が決まっている。この教科書については、口頭でも、2014年の11月末に行われる JALT 世界大会で紹介し、プレゼンテーションの参加者には配布する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

塩澤正 「国際英語論」の視点に立った英語教育とは—具体的目標と留意点— 『現代社会と英語 - 英語の多様性を見つめて』 塩澤正他編, 2014, 金星堂 査読有 pp. 163-174

吉川寛・小宮富子・塩澤正・倉橋洋子・下内充 「英語多変種との接触が学習

者の英語観に与える影響 Outer Circle の英語に焦点を当てて」 『JACET 中部支部紀要』 第10号, 査読有 2012, pp. 55-80.

塩澤正 「英語教師に勧める「異文化理解」に関する本」 『英語教育』 62巻 2012 査読なし pp. 30-31

塩澤正 「学校でしかできない英語教育とは大修館」 『英語教育』 第60巻第6号 査読なし, 2011 pp.19-21

〔学会発表〕(計4件)

Tadashi Shiozawa, Gregory King JALT 40th Annual International Conference on Language 2014年11月23日 筑波国際会議場(予定)

塩澤正 国際英語論の考え方を反映した英語教育とは?—情意レベルを刺激する肯定的体験学習のすすめ—大学英語教育学会中部支部 12月定例研究会 2013年12月21日 中京大学

塩澤正 「再考: 児童にとってのコミュニケーションとは? - 国際英語論の視点から」 日本児童英語教育学会中部支部春季研究大会 2012年5月19日 中部大学名古屋キャンパス

Hiroshi Yoshikawa, Tadashi Shiozawa, et. al “Affective competence and World Englishes” 大学英語教育学会第50回記念国際大会 2011年9月1日 西南学院大学

〔図書〕(計3件)

吉川寛・小宮富子・塩澤正・倉橋洋子・

下内充 『国際英語論が英語教育を救う(仮)』 2014年年度末出版予定

塩澤正, Gregory King *Global Activator* 金星堂 2014年11月出版予定

塩澤正 『現代社会と英語 - 英語の多様性を見つめて』編 2014.3 総ページ数397ページ 金星堂

〔その他〕  
ホームページ等 なし

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

塩澤 正 (SHIOZAWA, Tadashi)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：10226095